

ムージルの「熱狂家たちスキャンダル」その後 ーケルの批評「エレオノーレ・カルコフスカ：『ヨーゼフ』」について

長谷川 淳 基*

Ein ergänzender Bericht zum Robert Musils Schwärmerskandal
Alfred Kerrs Kritik über Eleonore Kalkowska: „Josef“

Junki HASEGAWA

I はじめに

1929年の春4月、この時期に「熱狂家たちスキャンダル」が起きた。ムージルの劇作品『熱狂家たち』がベルリンの劇場で初演されたのだが散々の結果に終わり、またこの上演そのものにとどまらず、その前後の時期の抗議やら訴訟沙汰も含めて、とはすなわち劇場の内でも外でもということであるが、大きな騒動が巻き上がった。

初演興行に先立ち、作家当人のムージルがこの上演に反対する旨を新聞各紙に発表していた。主たる理由は、『熱狂家たち』を演出するレーアマンへのムージルの不満にあった。

『熱狂家たち』初演は結局ムージルの意思を無視する形で強行された。結果はまったくの不評、失敗。長年にわたりムージルの庇護者を自ら任じてきた批評家アルフレート・ケルは、それでもこの公演について長文の批評を発表した。

その批評であるが、その中で何とケルは、ムージルが自ら抗議し、繰り返し非難の言葉を投げ与えた当の相手の演出家レーアマンを擁護し、その演出ぶりを褒めたのであった。

この批評を受けて、実際のところはこの批評だけではないのが、というのも批評界を代表する人物はケルであり、彼の批評の影響力はドイツ中の批評を束ねても、それを上回る影響力を持っていたがゆえに何よりもケルの批評内容を念頭において、ムージルは急ぎエッセイ「熱狂家たちスキャンダル」を発表した。ムージルはこのエッセイで、レーアマンを忌避する理由を自身の現代演劇批判論として大きく捉えなおし、あらためて彼の演出の非を明らかにした。同時に、そのエッセイでムージルは今回の『熱狂家たち』上演に関し、レーアマンの側に与する演劇批評ならびにムージル文学の真意に無縁の批評のことごとくを厳しく批判した。それら批評の頂点の位置を占めるもの、あるいは最大の影響力を持つ批評は言うまでもなくアルフレート・ケルの批評であった。ムージルは名指しこそ避けたものの、ケルの批評の内容に具体的に言及し、これを嘆き、かつ否定した。1929年4月20日付「ターゲブーフ」誌においてのことである。

* 人間関係学部 人間関係学科

ムージルはこのエッセイでケルと終生の縁を切ろうとしたのであったろうか。結果からすればそういうことになる。このとき以降ムージルの側からケルと接触した事実は確認できない。ケルの側はどうか。亡命先のロンドンでムージルの訃報に接してケルが読んだ弔辞を別にして、ケルの方は二度ムージルについて公に文章を書いた。ひとつは翌年1930年、ムージルの『特性のない男』出版に際して、ケルは短いものながらこれについて書いた¹⁾。

もうひとつが以下本論でとりあげる文章である。

II ケルの批評「エレオノーレ・カルコフスカ：『ヨーゼフ』」

『熱狂家たち』初演から12日後、1929年4月15日月曜日、ベルリナー・ターゲブラット夕刊第3面下段。アルフレート・ケルはお決まりの欄に「エレオノーレ・カルコフスカ：『ヨーゼフ』」という表題の劇評を発表した²⁾。前日の4月14日、昼11時30分に舞台の幕が開いたベルリン初演作品『ヨーゼフ』を論じたものであった。

無名と言ってもよい劇作家エレオノーレ・カルコフスカ、その作品『ヨーゼフ』をケルはこの批評で大きく扱い、論じている。この批評の第XI章でケルはムージルに言及した。気になるこの項目から見ることにしよう。

XI

ローベルト・ムージルも先ごろ同様の抗議を行なった。私は後になってこのことを知った。書店に対してであって、演出家に対するものではなかった。

ムージルは文句を言った — しかし文句など言う必要はなかった。というのもレーアマンは芸術についての仕事を果たしたのだから。これに対しカルコフスカの抗議は……

というものである。この続きの項目で「カルコフスカの抗議」に関することがまとめられ、さらにもう一項目あって、それをもってこの日の批評が締めくくられている。この『ヨーゼフ』批評は出版されているケルの新版劇評集などにも採られていないものであり³⁾、何よりもこの時点でのケルとムージルの関係、あるいはこの後、二人の終生の関係を考える上での重要な資料であると考えられるので、この日の批評を詳細に見ることにしたい。まずは批評全文を読むことにしよう。

エレオノーレ・カルコフスカ：『ヨーゼフ』

フォルクス・ビューネ

(スタジオ上演。ドイツ人権連盟の後援による)

I

ヤクボフスキー事件、ドラマ化。

この死刑判決に対するこのところの3度目の劇作品。(レオンハルト・フランクの『動機』、アルフレート・ヴォルフエンシュタインの『斧の夜』に続いて)カルコフスカ女史はいい仕事をした。いい作品を書いたのではなくとも。

II

確かに目撃者は以下のように言うだろう：

「ドラマ即席工場！ 正義についての事柄を、演劇論的に問題のある作品によって脅かすべきではない……。劇場にあってはこの先は当分の期間、死刑判決を受けた者が窓格子をがたがた揺さぶる演技などは自粛することが求められよう。こうしたシーンがお決まりのパターンとなる。感覚の鈍磨……。」

III

そういうことではない。稀なことではあるが、誇張され戯画化されたドラマではあるものの、この作品にあっては良き事柄が展開されているのである。

というのも、この戯画化された作品は一見してそれと分かるものになっているからである。その生彩、その颯爽、現実への見通し。

というのも、司法の領域では残念なことに、現実が戯画化されていること稀ではないからである。

IV

フランクとヴォルフエンシュタインは、事実はひょっとするところかもしれない、という事例を示す。果敢なるカルコフスカは、事実はこうだ、という事例を示す。（大臣を務めたエーリヒ・ミューザムの劇作品『サッコとヴァンツェリ』だけが将来も観客を見出すことになろう。）

カルコフスカ女史はこの上なく明瞭に、話し下手ながら善良なポーランド出身の傭兵、ドイツで捕虜となったよそ者を描き出す — この男は数年前にメクレンブルクで虐殺された。

虐殺された。すなわち、彼の最大限の不利を仮定して、このヤクボフスキーが三歳の子供殺害に何らかの関わりがあったと言うとき。これについて証拠のかけすら存在しないのだから。

虐殺された。すなわち、単に疑わしいというだけで人の首を刎ねること、可能だということだけを根拠に元の状態に復し得ないよう零にしてしまうこと。これは残虐行為だから。

殺人と呼ぶ根拠……他の人たちと異なる特徴を有していたから？ 生涯にわたる懲役という「恩赦」さえも頑なに拒否された結果として？ いや、首を。首を刎ねるのだ！

V

罪があるのは、ここでは（文士にとってということだが）殺された者ではなく、殺した人間すなわち法廷である。

その文士たちの倦むことのない、然るべき評価を受けることのない行為こそは、人間の魂に対して慰めと幸福の感情をもたらす。その人々は、これから後の時代にも影響を及ぼすこの拷問と車裂きの判例に、最後の光を投げかけその詳細を明らかにする。彼らに対する我々の感謝は必ずや尽きることはない。

このさき個々の点が解明されるのかもしれない。しかし、この事件での処刑は罪である。罪。罪である。

裁判官は将来その不正を暴かれ、軽率なるその殺人ゆえに監獄行きになるとい

い。そうすれば後輩たちは判決を7倍慎重に考えるだろうから。

VI

今日の午前は、美学上は問題のあるものの、確固たる良心の持ち主による作品のおかげで無駄ではなかった。

ヤクボフスキー事件が片付けられたからには、この作品も片付けられることになる。(こちらの作品は白、あちらは黒というやり方で。)

彼女はよい作品は書かなかった。しかし彼女はよい仕事をなした。後者の方が、より重要。

VII

彼女の潤い豊かな才能、その技法については申し分ない。それを示すように芝居のさなか、いうなれば爆弾がはじける。これが何とも小気味よい。

芝居の中で、彼女は例えば11月9日を持ち出す。この哀れなスラブ人の小作農(カルホフが演じ、ポーランド語ではなくロシア語を話すのであるが、そこには内的かつ外的な生命力が感じられ、忘れがたいものである)……この途方にくれた小作農が、ついでのように言うのである(エレオノーレよ、何と扇動的なことか)。彼にとって11月9日は聖なる祝日である、と。この虐げられた男、貧者、善良な男にとって。

劇場は芝居の腰を折るこの抗議声明にどよめく。

あっぱれエレオノーレ。

VIII

あるいは、現在のドイツ司法について言及がなされる — 劇場がどよめく……笑いの渦。こうした瞬間は意義深いものである。

(これとは逆の芝居よ、出でよ。「賢明な裁判官」が再来する素晴らしい時代を希求する旗が当地に掲げられたのは、最近のことである。そうこうする間にも、一人の人物がすでに現れた — この人は我々の友人ゲオルゲ・グロスに無罪判決を下した⁴⁾。彼を称えて名前を挙げておこう。ジージェルトである。)

IX

一番大きな爆弾は芝居の終わりに炸裂した。下りたカーテンの前にカルコフスカちゃんが決然とした歩みで登場。静かに。しーっ …… しーっ。このお芝居は演出家により去勢された、と言っている。二つの最も大事なシーンが抹殺された。彼女の意思を顧慮することなく、無理やりに。全身全霊……。演劇後援者の思い上がり……。

彼女は正しい。「オーサーがファースト！」とアメリカ人なら言うだろう。ベルリン人いわく「作家は鼻ではない」。(作者というものは決して、決して、決して一番ではない。)

X

特別席から声上がる。反平和主義的。それへの反対の声。「うるさいぞー！」それにもかかわらず中央の座席あたりから罵声。前方へ向かって罵声、後方へ「黙れ！」の声。芝居を続けるようにと言っているのだろうか？ 削除された部分を演じるように、というのだろうか？

ムージルの「熱狂家たちスキャンダル」その後

カルコフスカが前に立った。自分の立場を主張した。臆するところがなかった。生きることは楽しいことであった。ああ、ドイツよ。お前がもっともっと、こうであればいいのに。

この日の午前は決して無駄なものでなかった。

XI

ローベルト・ムージルも先ごろ同様の抗議を行なった。私は後になってこのことを知った。書店に対してであって、演出家に対するものではなかった。

ムージルは文句を言った — しかし文句など言う必要はなかった。というのもレーアマンは芸術についての仕事を果たしたのだから。これに対しカルコフスカの抗議は……

XII

最終報告と要約：

1. カルコフスカは演出家に抗議を行なう。
2. ホリチャー⁵⁾ は「人権連盟の名で」削除に対し抗議を行なう。
3. 連盟はホリチャーに対し、連盟の名で行なわれた抗議に抗議する。
4. 演出家（トロストラー）はカルコフスカの抗議に対して抗議するが、それよりもホリチャーの抗議ならびにカルコフスカの抗議に対する連盟の抗議を強調する。

XIII

これこれ、子供たち！

とにもかくにも、無駄な午前の時間ではなかったのだからね。

アルフレート・ケル

これがケルの『ヨーゼフ』批評の全部である。批評の内容について以下に確認しておこう。

Ⅲ 批評の内容について

ケルの批評の I. から IV. までを読むと、カルコフスカの戯曲『ヨーゼフ』の作品内容とその意義についての輪郭が分かる。『ヨーゼフ』は事実取材した作品であり、作品に描かれているヨーゼフへの死刑判決には、どうやら重大な事実誤認があったということである。

第一次大戦終了から第二次大戦開戦までのドイツ、いわゆるワイマル共和国時代、この戯曲で取り上げられている「ヤクボフスキー事件」はこの時期の国民意識を反映した冤罪事件として当時から大きな話題になり、今に伝わる。

カルコフスカの作品『ヨーゼフ』そのものは、ケルがここで予想しているとおりに、やがて作者の名前共々に世間から忘れられてしまう。が、一人の研究者が博士論文のテーマとしてカルコフスカに注目したことにより、つい先ごろ本の形で出版され、2010年の今、我々はこの作品⁶⁾ 並びに研究成果⁷⁾ を読むことができる。

22の短い場面からなる同作品の主人公ヨーゼフはロシア傭兵としてドイツと戦い捕虜となったが、戦後も故国ポーランドに帰ることなく、ここドイツ東部の村で暮らす。しかしながら、このヨーゼフが周囲の村人に受け入れられて暮らしているとは見えない。彼の話すドイツ語が極端なポーランド訛りを帯びており、あるいは生来の寡黙さも影響しているのであろう、彼は村人の中で孤立し、若い娘たちから嘲笑を浴びせかけられることも毎度のことであった。そうした中、居酒屋で働くマリーが彼に好意を示す。マリーはヨーゼフを自宅に招き、ほどなくして彼女の側から彼に結婚の意志が示される。降って沸いたようなヨーゼフの幸せはすぐに冷水を浴びせかけられる。マリーは身ごもっていた。お腹の子供はマリーが乱暴を受けてできた子供だった。マリーはその相手の男については頑なに沈黙した。いずれにせよ誰か然るべき夫が必要だった。

今や事情が呑み込めたヨーゼフは、混乱の気持ちを拭えないながらも、これだけのことを口にする「聖ヨーゼフ、彼は俺の守護聖人だ。聖ヨーゼフはおさなごイエスを自分の子供として受け入れた。なぜこの取るに足らない俺が、見知らぬ子供を受け入れないってことがあろう。俺がもっと早くここへ来てたら、その子は俺の子だったにちがいない。だとしたら、どちみち同じことだ」。

このマリーが二年ほど後に病気のために死ぬ。マリーの三人の弟のうち一番年長の弟グスタフ、この家の同居人の男クロイツ、その仲間クライシュラー。この三人が生まれてきた子供を厄介払いとばかりに殺害し、その罪をヨーゼフにかぶせる。

そして裁判。ヨーゼフと検察官ならびに裁判官との間の意思疎通の不成立。あるいはヨーゼフの話す言葉に対し、彼らの間に生じる嫌悪感と理解拒否の態度。ヨーゼフへの死刑判決。死刑の執行。再び戻ってきた村の平和。

その他、マリーの死後ヨーゼフに「私も女、それほど年を取ってもいない」と言い寄るもののヨーゼフに退けられ、彼を逆恨みするマリーの母親パイニツヒ夫人。独り者になったヨーゼフの前に現れる金持ちで美しい寡婦アンナ・シュトースの薄情けなどが描きこまれている。作品のあらまは以上である。

村人のみならず、法をつかさどる人々を覆う偏見。カルコフスカはこれを現代ドイツの特徴とし、その愚かさを聖家族ヨーゼフ、マリア、キリストの受難劇として描き出した。

事件の事実経過⁸⁾は、ケルが批評に引いている日付、1924年11月9日に子供が行方不明になり、その後子供が死体となって発見される。1925年3月にヨーゼフ・ヤクボフスキーへの死刑判決。その後の再審申し立て、それへの拒否を経て、死刑の執行は1926年1月のことである。

1928年になって、その後の警察の捜査の結果、母親と息子らがヤクボフスキーについて偽証したことを自白するにいたる。

1929年3月12日にカルコフスカの『ヨーゼフ』がドルトムント市立劇場で初演され、その1ヵ月後の4月14日ベルリンで再演されたわけである。

「主犯ヤクボフスキー」の「共犯者」として長兄グスタフには、このあと1930年4月になって死刑の判決が下されるが恩赦があり終身刑に減刑された。

ヤクボフスキーについては、この後彼の両親から息子ヤクボフスキーの無罪判決の請求が出されるが、裁判所はこれには答えなかった。また人権団体がヤクボフスキーを裁いた当時の検事ならびに地方裁判所長官を法律乱用の廉で訴えたが、これについても裁判所は

審理を拒否した。

ケル、そしてカルコフスカ。いずれも東部地域の出身である。もちろんベルリンで活躍する人物たちとしてはそのことは何ら特別のこととは言えない。が、二人ながら言葉の問題について、民族的偏見についてヤクボフスキーに深く同情するところがあったことは間違いのないところであろう。

Ⅲ ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル

ムージルの『熱狂家たち』初演は1929年4月3日、これへのケルの批評は翌4月4日朝刊に速報としての短評が、同日夕刊に本批評が発表された。ケルはこの批評を補う形の文章を10日あまり後の4月15日に、カルコフスカの『ヨーゼフ』を論じた批評に書いたわけである。ムージルが『熱狂家たち』初演の騒動を総括したエッセイ「熱狂家たちスキャンダル」を発表するのは、これからさらに5日後の4月20日の日付である。

ムージルの20日付のエッセイであるが、彼が15日付のケルの文章、すなわち『ヨーゼフ』批評を読んだ上でそのエッセイを書いたと考えることはできない。

ケルの文章をあらためて読んでみよう。

「ローベルト・ムージルも先ごろ同様の抗議を行なった。私は後になってこのことを知った」とケルは言う。後になって、とはいつのことか。ケルの最大のライバルであるイエーリングが君臨するベルリナー・ベルゼン・クーリア紙に「ローベルト・ムージル、抗議する」が、目立つ見出しで掲載されたのは3月27日である。その他の新聞報道はさておくとしても、ケルならではの言い抜けというほかはない。自分はムージルの気持ちを前もって知らなかった、知らないからこそ素朴に『熱狂家たち』上演に関心を抱いた、批評も見たまま感じたままを書いた、とケルはここで主張しているのである。

なぜこのようにケルが書くのか。ムージルを宥めているのである。

「書店に対してであって、演出家に対するものではなかった」と続けてケルは書く。なるほど訴訟沙汰については、ムージルと『熱狂家たち』の上演権を獲得したミュンヘンのドライ・マスケン出版社の間に持ち上がったことではあったが、上記のクーリア紙の記事の中でもムージルははっきりとレーアマンひとり指名して抗議している。

「ムージルは文句を言った — しかし文句など言う必要はなかった。というのもレーアマンは芸術についての仕事を果たしたのだから」に続く文で、ケルはあらためてレーアマンを擁護している。ただしムージルを巧みに、レーアマンに肩入れしながらも褒めている。ムージルが到達している芸術的高みについては何らあらためて言葉を費やす必要はない、それは自明のことだからである、レーアマンはそれを傷つけることなど何らしていない、ムージルは安心していいのだ、このようにケルは言おうとしている。

もう一度繰り返そう。ケルは「ローベルト・ムージルも先ごろ同様の抗議を行なった。私は後になってこのことを知った」と書く。『熱狂家たち』初演を論じたケルの批評のどの言葉、どの表現からも、ケルがこの上演にまつわるあれこれについて、ウラもオモテもそのすべての事情に通じた上で書いたことは明らかだ。ムージルに対してケルは長きにわたり産みの親そして育ての親を自任してきた。そしてレーアマンについてもケルは、その期間はムージルに対するほどではないが、やはり庇護者として振舞っていた。「私は後になっ

てこのことを知った」という鉄面皮なケルの弁解の言葉には呆れるほかはない。

しかし、これでよいとも言えるのである。ムージル、そしてケル。二人はこれを機に終生の仲たがいをしようとは考えていない。そう言い切ることができる。

ならば、呆れるような、あるいは鉄面皮な言い訳でいいのである。別のきっかけで、また関係の修復が可能になるからである。ケルは『ヨーゼフ』批評のこのくだりで、そうしたサインをムージルに送ったのであった。

ケルは『ヨーゼフ』批評の XI. でムージルのことを書いた。ムージルをなだめるための文章である。ケルがムージルに譲歩の気持ちを示した文章といえる。続く XII. の項目で、ケルはカルコフスカが抗議の姿勢を示したことを述べて、結びの XIII. の項目がくる。

「これこれ、子供たち！」Kinder, Kinder! と親が子供を、あるいは小学校の教師が生徒をたしなめるような口調で、ケルはこの結びの章を始めている。このたしなめられている子供らの中にムージルが含まれていないと読む者はいないであろう。

なぜか。『ヨーゼフ』批評の結びとして、この XIII. の文章は気楽に過ぎるからである。この日のケルは、作品に、あるいはヨーゼフ個人に対し共感を新たに示した。あらためて義憤の念も込み上げてきた。それが批評の文章に表れている。事実を舞台に載せたとも言える作品であった。劇場にはカルコフスカが居合わせて、自らの意思を観客に示すこともしたようだ。彼女の真剣な様が想像される⁹⁾。

そうした芝居上演について、これこれ子供たち、喧嘩なんかしちゃダメだよ、みんな仲良くしようね、とのケルの締めくくりがなじまないのである。

この呼びかけは、ムージルに向けられたと読めばこそ胸に落ちる。あちらでも、そしてこちらでも劇場のスキヤンダル。「子供たち」との複数形も納得がゆく。

この『ヨーゼフ』批評について書き始めるときから、あるいは『熱狂家たち』初演の4月3日以降、ケルは常にムージルのことが頭にあったに違いない。ムージルと自分との間に何らかの決定的な溝が生じることへの危惧の念である。ケルはこの心配を、冗談めかした調子で払拭しようとした。

冗談めかしの留まっていない。カルコフスカの今回の作品を評して、作品としてのできはよくない、それでも芝居の上演そのものには意義があった。このようにケルが『ヨーゼフ』を評するとき、その言葉はやはりほんの10日前の『熱狂家たち』観劇の印象に重なるものがある。ケルは決して『熱狂家たち』を評価してはいなかった¹⁰⁾。

IV 結び

ムージルがケルと最終的に何としてでも袂を分かとうと考える気持ちがあったなら、以上述べてきた判断に無理があるかもしれない。愛想尽かしの様な気持ちがムージルにあったなら、そのことはケルに伝わっていたはずである。しかし、ケルはその後『特性のない男』に筆を費やしている。ケルとムージルの間に決定的な不信、離反は生じていなかったわけである。少なくともケルの側からすれば、そうであったろう。

ムージルとケルの生涯の関係。それはいつ、どのように生じ、どう展開し、そしていつどのようにして終わりを告げたのか。二人の関係がムージルの作家人生に何をもたらしたのか。本論はこうした疑問究明の最終シーンのひとつを描くものであった。

ムージルの「熱狂家たちスキャンダル」その後

4月15日の新聞紙上でケルは、ムージルに歩み寄りの気持ちをアピールした。20日付の雑誌でムージルはケルのこの度の姿勢、即ち彼の批評を厳しくなじり、嘆いた。

このムージルのエッセイにより、関係修復の意図を込めたケルの文章が無意味になってしまった。ムージルはこうしたケルの意図をふいにするような文章を発表してしまったのである。ムージルはケルの面目を潰したわけである。スキャンダルがいつしか下火になったであろう後に、ムージルに残った思いはこのようなものであったろう。

ケルの批評、ムージルのエッセイ、二つが交差したことは二人にとっては不運であった。

ところで、ムージルが15日のケルの批評を読んだ上でエッセイ「熱狂家たちスキャンダル」を書いた可能性については、あり得ることとして考えられるであろうか。

雑誌という性格から、前日に原稿を書いて翌日には読者の手元に届くということはなからう。何よりもムージルのエッセイが、初演の舞台への関心からのみ成っている。それでもムージルが15日のケルの批評を読んだ上で、自らのエッセイを書いた可能性を完全に排除できるわけではないが、そうであったならムージルはケルの譲歩のサインを一蹴したことになる。知りつつ無視をして自らを押し通したことになる。ケルのことである、仮に事実がこのようなことであればケルはムージルを許さなかったであろう。

いずれにしても、ということで論を進めよう。5日違いで交差した両者の考えは、双方に気まずさを残さずにはいない性質のものであった。

先にも述べたようにケルは Kinder, Kinder! と、おとぎ話に出てくるしっかり者で、愛情いっぱい母親がいたずらっ子をたしなめるようにして、ムージルに相対したところ、ムージルの方は例によって、理屈と皮肉とからなる渾身のエッセイにより応じたのであった。

ムージルとケルの両者にとって、気まずくもあれば、こっけいなシーンでもあった。

しかし、そうではあっても、いや、そうであるからこそ、二人の関係は決定的に傷つくことはなかったのであった。

ケルはもう一度の機会に、ムージルに言葉を費やす。『特性のない男』についてである。もっとも、これが割り引いたような文であらざるを得なかったのは、すなわちコリーノが「遅れてきた誕生日のあいさつ¹¹⁾」と評したケルのその批評については、こうした事情ないし経緯が少なからず影響したものと考えることができる。

注

- 1) *Am Tagesrand von Alfred Kerr*. In: *Berliner Tageblatt*, 11. November 1930, Morgen-Ausgabe
- 2) *Eleonore Kalkowska*. „Josef.“ In: *Berliner Tageblatt*, 15. April 1929, Abend-Ausgabe
- 3) 東独版のケル作品集には採られている。Alfred Kerr: *Sätze meines Lebens. Über Reisen, Kunst und Politik*. Hrsg. v. Helga Bemman, Berlin (Der Morgen) 1980, S. 577-581
- 4) この批評が出た5日前の1929年4月10日に、控訴審はグロスに無罪を言い渡した。『ベルリン 1928-1933 破局と転換の時代』平井正著、せりか書房、130ページ参照。
- 5) Arthur Holitscher (1869-1941) ジャーナリスト、文筆家。ムージルと同じくスイスに亡命し、ジュネーブに没した彼の甲辞を読んだのはムージルであった。Vgl. *Am Grab von Arthur*

- Holitscher*. In: Robert Musil: *Tagebücher II*. Hrsg. v. Adolf Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1983, S. 1218. その他, ホリチャーについてムージルは1914年にエッセイの中で言及している。Vgl. Ebd. S. 482, Anm. 21
- 6) Kalkowska, Eleonore: *Dramen. Josef. Minus×Minus = Plus!*, *Zeitungsnotizen*. Herausgegeben von Agnes Trapp. München (Martin Meidenbauer) 2008
- 7) Agnes Trapp: *Die Zeitstücke von Eleonore Kalkowska*. München (Martin Meidenbauer) 2009
- 8) Ebd. S. 73ff.
- 9) Ebd. S. 114ff. カルコフスカは幕が下りた直後舞台に上り, 芝居の最終場面が予定に反して今の時点で急遽カットになったことを観客に明かした。この訴えを聞いた観客たちは, ならばすぐにもう一度幕を上げて, 事前に準備されていたままに最終場面を今すぐ続けて上演するようにと声を上げ, 騒ぎとなった。このあとエルヴィン・ピスカトールが舞台上から観客を説き伏せ, この夜の騒ぎは収まった。
- 10) Vgl. Karl Corino: *Robert Musil und Alfred Kerr*. In: Karl Dinklage u. a. (Hg.): *Robert Musil. Studien zu seinem Werk*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1970, S. 276f.
- 11) Karl Corino: *Robert Musil*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2003, S. 997f.